

※竹の中から女の子を見つけた翁は、「わしの子になるべき人だ」と決め、女の子を連れ帰り、媪(おうな)とおおあさんと一緒に育てた。女の子は竹のようにすくすくと大きくなり、三か月ほどで立派な女性に成長し、まるでこの世の人とは思えないほどたいそうな美人になった。翁と媪は彼女を見ると、疲れも癒えていった。やがて、女の子は「なよ竹のかぐや姫」と名づけられ、多くの男たちが結婚を求めた。なかでも、「恋愛の達人」と言われる五人の貴公子が熱心にかぐや姫のもとを訪れてきた。翁は五人の情熱に気おされ、かぐや姫に五人のうちの一人与結婚するように求めた。そして、かぐや姫は「望みの品を持参した人と結婚する」と言い、五人に難題を出した。その中の一人であるくらもちの皇子は、蓬萊の玉の枝を探しに行くふりをして、人目につかぬ家に閉じこもり、玉作の職人たちににせものの玉の枝を作らせた。三年後、皇子はかぐや姫のもとを訪れ、「蓬萊の玉の枝をやつと見つけた冒険談」を語る。

④ 「蓬萊の玉の枝」の内容をおさえよう。

これやわが求むる山ならむと思ひて、さすがに恐ろしくおぼえて、山のめぐりをさしめぐらし、二、三日ばかり、見歩くに、天人のよそほひしたる女、山の中よりいで来て、銀の金腕を持ち、水をくみ歩く。これを見て、船より下りて、「この山の名を何とか申す。」と問ふ。女、答へていはく、「これは、蓬萊の山なり。」と答ふ。これを聞くに、うれしきことかぎりなし。

その山、見るに、さらに登るべきやうなし。その山のそばひらをめぐれば、世の中になき花の木ども立てり。金・銀・瑠璃色の水、山より流れいでたり。それには、色々の玉の橋渡せり。そのあたりに、照り輝く木ども立てり。その中に、この取りてまうで来たりしは、いとわろかりしかども、のたまひしに違はましかばと、この花を折りてまうで来たるなり。

★次の謎を考えよう

①なぜ、「くらもちの皇子」はたどり着いた場所が「蓬萊山」と分かったのか。

②なぜ、「くらもちの皇子」は一番いい枝を取ってこなかったのか。

【口語訳】

これこそ私が探し求めていた山だろうと思って、うれしくはあるのですがやはり恐ろしく思われて、山の周囲をこぎ回らせて、二、三日ばかり、様子を見て回っていますと、天人の服装をした女性が、山の中から出てきて、銀のお腕を持って、水をくんでいきます。()

は(これを見て、船から下りて、「この山の名は何というのですか。」と尋ねました。女性は答えて、「これは、蓬萊の山です。」と言いました。これを聞いて、)

は(うれしくてたまりませんでした。

その山は、見ると、険しくて全く登りようがありません。その山の斜面の裾を回ってみると、この世には見られない花の木々が立っています。金・銀・瑠璃色の水が、山から流れ出てきます。その流れには、色さまざまの玉でできた橋が架かっています。その付近に、光り輝く木々が立っています。

その中で、ここに) が(取ってへ

<のは、)

(ものでしたが、

が)へ

<ものと違っ

ていてはいけなだろうと思ひ、この花の枝を)

が(折ってまいったのです。

※ウソの冒険談を得意げに語るくらもちの皇子。かぐや姫は、くらもちの皇子が持ってきた「蓬莱の玉の枝」が本物かにせ物か見分けがつかず、「もはやこまで」と思い悩む。(竹取の翁は、くらもちの皇子のウソ話を信じて、結婚前のお祝いをしようとする準備を始める。)ところが、そこへ玉作りの職人たちが押しかけ、玉の枝を作るために働いたお給料をかぐや姫に払ってほしいと訴える。これにより、皇子の策略は一気にばれてしまった。

ほかの四人もかぐや姫の望む品を手に入れることができず、求婚はすべて失敗に終わる。

このように、人々の心を奪うほどの美しさをもちかぐや姫の話題を聞いた帝(天皇)は、「ぜひ自分の妻にしたい」と、家来を竹取の翁の家に向かわせる。竹取の翁に「おいしい出世話を伝えて、かぐや姫を説得させようとする。どれも、うまくいかなくなると、ついに自ら竹取の翁の家までやって来る。(そして、かぐや姫は、透明人間のように一瞬消える。)なかなか自分になびかないかぐや姫に、さらにはれていく。帝は熱心にかぐや姫にお手紙を送り続け、やがてかぐや姫もそれに返事を書くようになった。かくして、二人は文通を通して、心を通い合わせっていくのだった。

ところが、二人が文通を初めて三年が経った春の初めから、かぐや姫は月を見てはなげき悲しむようになる。秋になり、さらに悲しみが増していくかぐや姫。耐えかねて、竹取の翁がかぐや姫に尋ねると、「私は、本当は月の者です。中秋の名月には、もう月に帰らねばなりません。」と真実を打ち明けた。

翁も帝も、必死になってかぐや姫を月に帰らすまいとするが、抵抗がなくなりかぐや姫は月に帰る(昇天)ことに。かぐや姫は帝に手紙と不死の薬を残し、天に昇っていった。

帝は、かぐや姫がこの世からいなくなったことをひどく悲しみ、不死の薬などいらないと訴え、それを燃やすよう家来に伝える。そして、燃やす場所として、「日本で最も天に近い山」を指名したのだった。

5 「帝の後日談」を読み、内容をおさえよう。

御文、不死の薬の壺並べて、火をつけて燃

やすべきよし仰せたまふ。

そのよしうけたまはりて、士どもあまた

具して山へ登りけるよりなむ、その山を「ふ

じの山」とは名づけける。

その煙、いまだ雲の中へ立ち上るとぞ、言

ひ伝へたる。

【口語訳】

() は()お手紙と、不死の薬の壺を並べて、火をつけて燃やすようにと、(使者に)ご命令になった。

その旨を() が()うけたまわって兵士たちをたくさん引き連れて山に登ったということから、その山を()「士に富む山」、「つまり()「ふじの山」と名づけたのである。

その煙は、いまだに雲の中へ立ち上っていると、言い伝えられている。

★次の謎を考えよう。

①帝は、どのような思いで、かぐや姫にもらった手紙と不死の薬を燃やすように命じたのだろうか。

②帝はなぜ天に近い山を選んだのだろうか。

